

多様な地域的価値を育む海岸防災施設のあり方に関する研究 ～(その2)「命山」の管理実態および日常利用について～

A Study on the Coastal Disaster Prevention Facility that Develops on Various Regional Values ～(Part2) About of the management and daily utilization of “INOCHIYAMA”～

○鴨諸一¹, 横内憲久², 岡田智秀², 田部望実³, 齋藤陽介³
*Shoichi Kamo¹, Norihisa Yokouchi², Tomohide Okada², Nozomi Tabo³, Yosuke Saito³

Abstract: The purpose of this study is to clarify characteristic of ”INOCHIYAMA” (“ONO INOCHIYAMA”, ”NAKASHINDEN INOCHIYAMA” and “MINATO INOCHIYAMA”) by field surveys and interview in Fukuroi city. As a result, these coastal disaster prevention facilities have two-sidedness of an emergency and daily utilization.

1. はじめに—前項では、「大野命山」および「中新田命山」の造成に至った歴史的背景ならびに空間的特徴について述べてきた。そこで本稿では、造成後の「命山」の管理・利用実態と地元地域に与えた影響を捉えるため、前稿に引き続き、静岡県袋井市浅羽地区に存在する「大野命山」「中新田命山」そして新たに、2013(平成25)年12月に造成された「湊命山」を対象に、これらの管理・利用実態や地元地域への影響、さらには「命山」の優位性について考察を行う。

2. 分析内容—上述の考察を行うため、前稿で述べた、文献調査ならびにヒアリング調査を通じて、命山造成後から現在に至るまでの歴史的特徴や、管理・利用および今後の計画内容を時系列で示したものが図1であり、浅羽地区に新設された「湊命山」と津波避難タワーの構造・費用等を比較したものが表1である。以降では、これらを基に考察を行う。

3. 結果および考察

(1) 造成後から戦前までの「命山」—「命山」を造成するに至った最大の要因は、前稿で述べたように、度重なる洪水・高潮災害であり、その被害が最も大きかったのが1680(延宝8)年に発生した延宝の高潮であった。この災害を受け、地元住民は本多利長の命の下「命山」を造成したのである。これ以降では、1698(元禄11)年、1699(元禄12)年に起きた2度の高潮災害等を含め、幾度となく洪水・高潮災害が浅羽地区を来襲したが、「命山」やツキヤマに避難した地元住民の多くが難を逃れている^[1]。

こうした「命山」の戦前までの管理・利用実態としては、草刈りや「命山」の頂上に設置してある祠の管理が中心であった。このことから、当時の「命山」が地元住民にとって日常的にも大切にされていた様子が伺える

(2) 戦後から現在に至るまでの「命山」—戦後間もなく、旧袋井市と旧浅羽町は耕地整理、宅地整備、国道整備等を展開していった結果、1970(昭和46)年代以降には、浅羽大囲堤は消失(現在は跡地が2カ所存在)し、加えて「命山」も次第に地元住民の海岸防災施設としての利用がなされなくなっていった。

しかしながら、2007(平成19)年に静岡県が「大野命山」「中新田命山」を静岡県指定の文化財に登録したことで^[2]、戦後以降に管理が疎かになっていた「命山」を、静岡県と袋井市が再整備することになった。そして、2011(平成23)年に発生した東日本大震災での津波災害の様子を目の当たりにして、浅羽地区の地元住民(浅羽南地区連合会)は「幸浦プロジェクト」と題して、新たな命山整備を含む津波対策早期着手の要望書を袋井市長に提出した。その後、新たな「命山」整備方針や、その基本形状等が協議され、2012(平成24)年11月に“平成の命山”と称される「湊命山」の造成に着手、翌2013年12月に完成をみた^[3]。

この「湊命山」管理実態としては、市と地元住民の共同によって草刈りが行われている。日常利用としては、袋井市の眺望点に指定されていることから^[3]、初日の出の参拝やそれに関連する催しなどがすでに行われており、今後は花見等の恒例行事を増やして、地域のコミュニティスペースとしての日常利用を積極的に展開する見込みである。

(3) 当地区の今後の「命山」の整備—袋井市には現在、3基の「命山」に加え、津波避難タワーを1基保有している。今後本市では、大野、中新田・東同笠、湊西の計3地区にそれぞれ1基ずつ、「命山」を造成することを検討している。

(4) 「命山」の優位性—浅羽地区に現存する「命山」と津波避難タワーの諸元を示した表2において両者比

1 : 日大理工・院・不動産 2 : 日大理工・教員・まち 3 : 日大理工・学部・交通

較すると、「建設費」はほぼ同等であることがわかる。しかし、「収容人数」をはじめ、「耐用年数」「利用形態」はいずれも「命山」が優位といえそうである。他方「命山」の「敷地面積」が9倍にも及ぶことから、地価が

高額な地域や狭隘地域にあつては、地域ごとの地理条件を考慮して、「命山」の導入に十分な検討を重ねる必要がある。

表 1 浅羽地区における「湊命山」と津波避難タワーの諸元

内容	湊命山	津波避難タワー
構造	盛土(太田川掘削土の利用)	鉄構造
素材	セメント、土、コンクリート等	鉄、メッキ等
敷地面積	6433 m ²	700 m ²
収容面積	約 1,300 m ² (避難スペース面積)	160 m ²
収容人員	約 1,300 人	約 270 人
高さ	10m	12m
利用形態	常時利用可	避難時のみ利用可
耐用年数	半永久的(一部盛土の維持管理が必要)	40~50 年程度
整備費	141,645 千円	115,392 千円

4. 参考文献

- [1] 静岡県：静岡県史別編 2 自然災害誌，p331, 1996
- [2] 浅羽町教育委員会：浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ，p26, 2003
- [3] 袋井市 HP <http://www.city.fukuroi.shizuoka.jp/>(閲覧日：2014.9.30)
- [4] 内閣府 HP <http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/>(閲覧日 2014.9.30)
- [5] 浅羽町史編さん委員会：浅羽町史通史編，浅羽町，pp.457-469, 1998
- [6] 浅羽町史編さん委員会：浅羽町史民俗編，浅羽町，pp.32-34, pp.41-46, 2000
- [7] 寒川旭：地震の日本史，中央公論新社，pp.165-168, 2011
- [8] 静岡県考古学会 2012 年度シンポジウム実行委員会：考古学からみた静岡の自然と復興，p61, 2013
- [9] 海津市歴史民俗資料館：備えの考古学—文化財から学ぶ防災—，pp.23-24, 2009
- [10] 袋井市：先人の知恵を受け継ぐ「平成の命山」
- [11] 袋井市：津波避難計画，2013.9



図 1 浅羽地区において「命山」をはじめとする海岸防災施設の造成およびその管理・利用実態の変遷